

## 優しさから生まれる幸せ

一宮市立北部中学校一年

松原 弘将

僕には毎月、とても楽しみにしている便りがある。夕方学校から帰宅し家のポストを覗き、その封筒が入っているとうれしくて真っ先に封を開ける。それは祖母が入居しているグループホームから届く毎月の便りだ。入居している方々の日常がカラー写真でふんだんに印刷されている。僕はまず、たくさん写真の中から大好きな祖母の写真を探し、見つけた瞬間うれしさを自然と笑みがこぼれてくる。先月は折り紙で紫色の花を作ったり、おやつレクで皆さんと一緒に楽しそうにおやつを食べたりしている祖母の姿が写っていた。

僕の祖母は、僕が小学五年生の時に祖父が亡くなり、祖父の死後しばらくしてアルツハイマー型認知症を発症した。認知症は、その人にとって大切な人や物を失ったショックや悲しみから誘発されることも珍しくはないそうだ。

僕が小さい頃、祖父母の家に行くと、いつもテーブルの上には祖母の手料理が溢れそうほど並んでいた。料理上手な祖母が作った食事を家族みんなで囲んで食べるのが僕は大好きだった。そんな祖母が認知症を発症したことを、初期の段階では僕達家族は誰も気づくことが出来なかった。祖父が亡くなってから一人暮らしとなった祖母は、僕達が遊びに行

くと、いつも変わらずご馳走を作って出迎えてくれていた。本当にいつもと何ら変わらず。

祖母の異変を知らせてくれたのは警察からの一本の電話だった。家の中に不審者が居ると、祖母が電話したからだ。そして警察の方は祖母からの通報は、これまでも何度かあったことも教えてくださった。祖母の病状には初期の頃には波があり、僕達家族と一緒に居るときはいつもの明るくて料理上手な祖母だったが、一人の時間に寂しさを感じると見えない人や物が見え、認知機能の低下が現れていることだった。

その後、認知症を発症した祖母と、祖母を支える僕達家族を助けてくださったのは、地域包括支援センターの方々だった。家族が行けない日は訪問していただき、父と母には認知症の方が入居するグループホームを紹介していただき、グループホームでは認知症ケアや生活自立サポートが行われ、その中で毎日のように様々なイベントが開催されていることだった。

祖母が入居して初めて会いに行ったときは、コロナ禍だったため、オンラインでの画面越しの面会だった。直接会うことは出来ないけれど画面の中の祖母は、トランプをしたりお花見に行ったりしたことなどを楽しそうに話してくれた。認知症は脳の刺激が少なくと進行が早まる可能性があることから、ホームで開催されているイベントや活動はとても大切なことだと施設の方が教えてくださった。僕が毎月楽しみにしているホームからの便りには、そのさまざまな楽しいイベントの様子が掲載されている。そして今、コロナの規制が緩和され、ホームに行くことと祖母と直接会うことが出来るようになった。画面越しのときと比べると直接会えることはとてもうれしいのだが、いつも決まって辛くなる時がある。認知症の祖母は、僕と弟の顔を見ると毎回必ず同じことを言う。「もうすぐしたらここを出て、そしたらまたご飯いっぱい作るからね。」と。その言葉を聞く度に僕は胸が締め付けられるように苦しくなり涙が出るのを堪えている。祖母の優しい言葉と、僕の大好きだった祖母の作ったケ

チャップのかかった熱々のハンバーグの味が思い出されてくる。

「福祉」とは、「すべての人が幸せに生活するためのとりくみ」とある。ホームで過ごしている今の祖母の姿には笑顔が多い。きつと大好きだった祖父が亡くなってから一人で過ごしていた頃よりも、今の祖母は「幸せ」なんだと思う。そんな祖母の幸せには、家族だけではなく、さまざまな方達のサポートがあるからこそだと僕は思う。

祖母の異変を最初に伝えてくださった警察の方々。グループホームを紹介し、支えてくださった支援センターの方々。そして今現在、祖母の生活をサポートしてくださっているグループホームの方々。

福祉とは幸せ。そして幸せとは「優しさ」でもあると僕は思う。今の祖母の生活はたくさんの方々のお優しさから生まれてきていると思う。その優しさに感謝の気持ちでいっぱいになる。そして僕も人を幸せに出来る人になりたいと思う。中学生の僕にも今出来ることはたくさんあるはずだ。学校生活の中にもあるだろうし、日常の中でも、例えば電車やバスで席を譲ることだってできる。毎日の生活の中で僕にできる優しさを行動に移していきたい。

一つでも幸せを増やしていけるように。

祖母の幸せそうな笑顔の便りを見て、僕はそう強く思った。

